

## 【B年】復活節第6主日(2023年5月14日)

## 【旧約聖書日課】ダニエル書 6章10～23節

<sup>10</sup>ダレイオス王は、その書面に署名して禁令を發布した。<sup>11</sup>ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた。<sup>12</sup>役人たちはやって来て、ダニエルがその神に祈り求めているのを見届け、<sup>13</sup>王の前に進み出、禁令を引き合いに出してこう言った。

「王様、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者があれば、獅子の洞窟に投げ込まれるという勅令に署名をなされたのではございませんか。」王は答えた。「そのとおりだ。メディアとペルシアの法律は廃棄されることはない。」<sup>14</sup>彼らは王に言った。「王様、ユグヤからの捕囚の一人ダニエルは、あなたさまをも、署名なされたその禁令をも無視して、日に三度祈りをささげています。」<sup>15</sup>王はこれを聞いてたいそう悩み、なんとかダニエルを助ける方法はないものかと心を砕き、救おうとして日の暮れるまで努力した。<sup>16</sup>役人たちは王のもとに来て言った。「王様、ご存じのとおり、メディアとペルシアの法律によれば、王による勅令や禁令は一切変更してはならないことになっております。」<sup>17</sup>それで王は命令を下し、ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれることになって引き出された。王は彼に言った。「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように。」<sup>18</sup>一つの石が洞窟の入り口に置かれ、王は自分の印と貴族たちの印で封をし、ダニエルに対する処置に変更がないようにした。

<sup>19</sup>王は宮殿に帰ったが、その夜は食を断ち、側女も近寄らせず、眠れずに過ごし、<sup>20</sup>夜が明けるとやいなや、急いで獅子の洞窟へ行った。<sup>21</sup>洞窟に近づくと、王は不安に満ちた声をあげて、ダニエルに呼びかけた。「ダニエル、ダニエル、生ける神の僕よ、お前がいつも拝んでいる神は、獅子からお前を救い出す力があつたか。」<sup>22</sup>ダニエルは王に答えた。「王様がとこしえまでも生き永らえられますように。」<sup>23</sup>神様が天使を送って獅子の口を閉ざしてくださいましたので、わたしはなんの危害も受けませんでした。神様に対するわたしの無実が認められたのです。そして王様、あなたさまに対しても、背いたことはございません。」

## 【使徒書日課】

## テサロニケの信徒への手紙二 3章1～5節

<sup>1</sup>終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところできらめられるように、<sup>2</sup>また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。<sup>3</sup>しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。<sup>4</sup>そして、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これからもきつと実行してくれることと、主によって確信しています。<sup>5</sup>どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるよう。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 7章1～10節

<sup>1</sup>イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。<sup>2</sup>ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。<sup>3</sup>イエスのことを聞いた百人隊長は、ユグヤ人の長老たちを使いに行って、部下を助けに来てくださるよう頼んだ。<sup>4</sup>長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。<sup>5</sup>わたしたちユグヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」<sup>6</sup>そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いに行って言させた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。<sup>7</sup>ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないとしました。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。<sup>8</sup>わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりになります。」<sup>9</sup>イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」<sup>10</sup>使いに行つた人たちが家に帰ってみると、その部下は元氣になっていた。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ダニエル書 6章10～23節

<sup>10</sup>そこで、ダレイオス王は、その禁令の文書に署名をした。<sup>11</sup>ダニエルは、文書が署名されたことを知って、自分の家に帰った。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かって開かれていた。彼は以前からしていたように、その日も三度、ひざまずき、祈り、自分の神に感謝した。

<sup>12</sup>すると、高官たちが押しかけて来て、ダニエルが自分の神に祈り、求めているのを見つけた。<sup>13</sup>彼らは、王の前に進み出て、王の禁令について言った。「王様、今から三十日間、あなたのほかに、いかなる神にであれ人にであれ祈る者はすべてライオンの穴に投げ込まれるという禁令にあなたは署名なされたではありませんか。」王は答えた。「この言葉は確かであって、メディアとペルシアの法に従い、取り消すことはできない。」<sup>14</sup>そこで、彼らは王に言った。「王様、ユダヤの捕囚の一人であるダニエルはあなたにも、またあなたが署名した禁令にも敬意を示さず、日に三度、祈っています。」<sup>15</sup>王はその言葉を聞いて大いに憂え、ダニエルを救おうと苦慮し、日没まで彼を助けようと努めた。<sup>16</sup>しかし、高官たちが王のもとに押しかけて来て、王に言った。「王様、メディアとペルシアの法をご承知ください。王様が定めるとのような禁令も法令も変更することはできません。」<sup>17</sup>それで王は、ダニエルを引き出し、ライオンの穴に投げ込むように命じた。王はダニエルに言った。「お前がいつも使えている神がお前を救い出してくださいるように。」<sup>18</sup>一つの石が運ばれてきて、穴の口に置かれた。王は自分の印章と貴族たちの印章でそれを封印し、ダニエルに対する処置が変更されないようにした。

<sup>19</sup>それから王は王宮に帰ったが、その夜は断食し、側女たちを召し寄せず、眠れずに過ごした。<sup>20</sup>王は夜が明けるとともに起き出し、急いでライオンの穴に行った。<sup>21</sup>ダニエルのいる穴に近づくと、王は悲痛な声で叫んで、ダニエルに言った。「生ける神の僕ダニエルよ、お前がいつも使えているお前の神は、ライオンからお前を救い出すことができたか。」<sup>22</sup>ダニエルは王に語りかけた。「王様がとこしえに生き長らえますように。」<sup>23</sup>私の神が御使いを遣わしてライオンの口を塞いでくださったので、ライオンは私に危害を加えませんでした。神の前に私が無実であることが認められたのです。王様、あなたに対しても私は悪いことをしていません。」

## テサロニケの信徒への手紙二 3章1～5節

<sup>1</sup>終わりに、きょうだいたち、私たちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところと同じように、速やかに広まり、崇められますように。<sup>2</sup>また、私たちがよこしまな悪人たちから逃れられますように。すべての人に信仰があるわけではないからです。<sup>3</sup>しかし、主は真実な方です。あなたがたを強め、悪しき者から守ってくださいます。<sup>4</sup>そして、私たちが命じることを、あなたがたが現に行っており、これからも行ってくれるものと、私たちは主にあって確信しています。<sup>5</sup>どうか、主があなたがたの心を、神の愛とキリストの忍耐へとまっすぐに向けさせてくださいますように。

## ルカによる福音書 7章1～10節

<sup>1</sup>イエスは、民衆の聞いている所でこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。<sup>2</sup>ところで、ある百人隊長に重んじられている僕が、病気で死にかけていた。<sup>3</sup>イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに行き、僕を助けに来てくださるよう頼んだ。<sup>4</sup>長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。<sup>5</sup>私たちの国民を愛して、会堂を建ててくれました。」<sup>6</sup>そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からあまり遠くない所まで来ると、百人隊長は友人たちを送って言わせた。「主よ、ご足労には及びません。私はあなたをわが家に〔直訳→私の屋根の下に〕お迎えできるような者ではありません。<sup>7</sup>それで、私の方からお伺いすることさえいたしませんでした。ただ、お言葉をください。そして、私の僕を癒してください。」<sup>8</sup>私も権威の下に服している人間ですが、私の下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また僕に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」<sup>9</sup>イエスはこれを聞いて驚き、付いて来た群衆の方を振り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、これほどの信仰は見たことがない。」<sup>10</sup>使いに行った人たちが家に帰ってみると、僕は元気になっていた。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・5月14日「復活節第6主日」の日課主題は「信仰に報いる主」。

・旧約聖書日課は、「ダニエル書」から、王の禁令を破り獅子の穴に投げ込まれたダニエルの逸話場面の中から。使徒書日課は、「テサロニケの信徒への手紙二」から、終わりの挨拶のはじめに祈りのリクエストが述べられる箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、イエスが百人隊長の部下の病気を癒した逸話箇所。

**旧約日課(ダニエル6章より)**

・「ダニエル書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の「諸書(ケトウビーム)」に区分される文書で、前6世紀のバビロン捕囚期を挟んでバビロンの地でバビロニア、メディア、ペルシアの王に仕えたと言われるユダヤ人ダニエルの物語として編集されている。1～6章は、ダニエルにまつわるさまざまな逸話物語の集成で、7～12章は、ダニエルが幻で見た啓示集として構成されている。このような構成区分にもかかわらず、翻訳の底本となっている正典本文では、1章～2章4節前半と8章以下がヘブライ語で、2章4節後半～7勝がアラム語で記されている。アラム語は、元来はシリア地方の一民族の言語として成立したが、前10世紀以降、メソポタミア～シリア地方を支配したアッシリア、バビロニア、ペルシャの各覇権国が公用語として採用するなど、この地方の諸民族の共通語として広く用いられてきた。「列王記下」18章には、前700年ごろの南王国ユダの王侯貴族らがアラム語を解する一方、ユダの庶民はアラム語を解さなかったとする叙述が見られる。ユダヤ人各層が広くアラム語を用いるようになったのは、おそらく前6世紀のバビロン捕囚以降であろう。前3世紀以降のヘレニズム時代に、エジプトなどではギリシア語の使用が一般化した。その時代にも、なおアラム語はメソポタミア・シリア地方の共通語として広く用いられた。しかし、後7世紀以降は、イスラム教の展開と共に広まったアラビア語にその地位を奪われた。近年の通説では、後1世紀のユダヤ・ガリラヤ地方在住のユダヤ人はアラム語を母語としていたとされるが、異説もある。「ダニエル書」の一部がアラム語で記されている理由は定かでない。「ダニエル」は、「エゼキエル書」中で「ノア」や「ヨブ」と共に伝説的な「義人(正しい人)」として名が挙げられており、おそらく、民間伝承の中で「義人伝説」として知られた存在だったと考えられる。その「ダニエル伝説」を素材として、時代背景の中に描き入れたのが、本書である。

・「ダニエル書」には、ダニエルが仕えた王の名として、バビロニア王ネブカドネツアル、同国王ベルシャツアル、メディア王ダレイオス、ペルシア王キュロスの名が挙げられている。ダレイオスは、その記述から、キュロスから数えて3代目のペルシア王、または6代目で「ケセルクセスの子」であるペルシア王がモデルと考え

られ、キュロス王に先行する「メディア王」という設定には時代錯誤がある。このような明らかな誤認は、本書がペルシア支配時代より後のヘレニズム時代になって編纂されたであろうことを示唆する。なお、「メディア」はもともと「ペルシア」の隣国で、キュロス王が両国を同君連合として統合したこと、覇権国への発展が始まったと考えられている。いずれにしても、バビロニアやペルシアの王は、ユダヤ人をはじめとする異民族の中から優秀な人材を高官として登用することで覇権的支配を維持しており、ダニエルの物語も、そのような人物をモデルにしている。

・キリスト教では、「ダニエル書」を「エゼキエル書」に続く位置に配置し、「預言書」の一つのように扱ってきた。この配置は、前2世紀ごろに編纂が進められたギリシア語旧約聖書(七十人訳聖書)の目次に基づくもの。七十人訳聖書の目次は、全体を可能な限り各書で設定された時代順に配置している。

・日課個所で描かれている物語にも特徴的に表れているように、「ダニエル書」の「義人ダニエル伝説物語」は、前2世紀以降に強まった「死に至るまで神に忠実な信仰義人を称揚」する「神の民ユダヤ民族主義」の傾向が強くみられる。同様の傾向は、「エズラ・ネヘミヤ記」や「歴代誌」、あるいは「マカバイ記」をはじめとする旧約統編各書に見られるもので、ユダヤ・キリスト教の歴史の中でも断続的に注目されてきた。

**使徒書日課(Ⅱテサロニケ3章より)**

・「テサロニケの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」に収められた書簡文書で、「手紙一」と共に、パウロがマケドニア宣教で設立にかかわったテサロニケの教会共同体に宛てた書簡として著されている。現代の聖書学者の中には、「手紙二」をパウロの真筆と認めず、パウロの後継者らによって作成された「第二パウロ書簡」として扱う者があるが、コンセンサスは得られていない。むしろ、「手紙二」は「手紙一」との類似性が高く、テサロニケ教会の置かれた状況変化に対応するための助言を与えようとして、重ねて著されたと考えられることも可能だろう。どちらにしても、当時の書簡は、差出人本人が全文を自ら筆を執って記すような習慣がなく、多くの部分は口述筆記によって代筆者が記した。その際、代筆者の判断がどのように働くかは、さまざまであっただろう。「テサロニケの信徒への手紙一」および「手紙二」は、いずれも「パウロ、シルワノ、テモテ」の連名で記されており、シルワノかテモテが代筆者であった可能性もあり、そうであれば、本文のかなりの部分の実際の記述が代筆者に任されて、「手紙一」を参照して記した、ということもあつたかもしれない。

・1節「終わりに(ト・ロイボン)」は、「残りの(ロイボス)」を意味する語で表現される慣用語で、「加えて」というようなニュアンスで用いられている。ここでは、必ずしも書簡の末尾に入ることを意味していない。直前2:15以下の勧めに「加えて」、「祈り」のリクエストをしようとしている。

・「パウロ書簡」では、日課個所にあるように、パウロが自身のために祈ってほしいと祈りのリクエストを記す例がある(ローマ 15:30~32、エフェソ 6:18、コロサイ 4:3、I テサ 5:25)。しかし、パウロは決まり文句として書簡末尾で祈りのリクエストを記しているわけではない。記されている例から推認すると、祈りのリクエストを記することができる相手を選んでいく可能性が高い。すなわち、相互に祈りに憶え合う交わりを持つことが可能と思われる相手、あるいは、そうなることを期待している相手に対して、リクエストを記していると考えられる。パウロにとって、「相互に祈りに憶え合う関係」に入っていくことは、難度の高いことであった。

### 福音書日課(ルカ7章より)

・日課個所は、いわゆる「百人隊長の僕の癒し」を伝える逸話が描かれている。同じ逸話と考えられる記事が、「マタイ福音書」と「ヨハネ福音書」でも見られるが、癒される対象の設定が少しずつ異なり、「マタイ」(8章)は単に「百人隊長+僕」、「ルカ」は「百人隊長+重んじられている部下」、「ヨハネ」(4章)は「王の役人+息子」となっている。いずれの伝える逸話も、場面は「カファルナウム」である。「カファルナウム」は、ガリラヤ湖の北端にある都市で、弟子のペトロが家を構えていたことが伝えられており(マルコ 1章など参照)、主イエスがガリラヤ宣教の活動拠点としていた。

・当時のカファルナウムには、ローマ軍の一個師団が駐屯していたとされ、メソポタミア流域とエジプトを結ぶ陸路交易の要衝として発展していた。一方、後1世紀当時のローマ帝国内では、ユダヤ人(ユダヤ教徒)は皇帝の庇護下に置かれており、異邦人からユダヤ人に改宗する者も少なくなかったが、そうでなくてもローマの軍人や役人がユダヤ人社会から好意を得ようとする動機は十分にあった。ユダヤ人に対する敵意は、むしろユダヤ人の特権的地位をやっかむ庶民から向けられた嫉妬によるものであった。

・百人隊長は、ローマ軍団の下士官で、忠誠と名誉を重んじるローマ軍団内では、すでに誇り高い地位であった。その意味でも、この逸話にあるような関係をユダヤ人社会との間で築いたということは、十分に考えられる。また、主イエスとのやり取りで認められる百人隊長の「信仰(ピスティス)」も、元来の意味は「信頼/忠実」であり(ラテン語では「フィデス」)、ローマの軍人の精神性と相通じるものがあると主イエスが理解されたとしても、何ら不思議ではないことである。

### 来週の誕生日 (5月14日~20日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

・21-14 番「たたえよ、王なるわれらの神を」は、19世紀以来イギリスの代表的な讃美歌の一つ。作詞のライトは英国教会司祭で 21-218 番「日暮れてやみはせまり」(I 39 番「日くれて四方はくらし」)も作詞。作曲のゴスは英セント・ポール大聖堂のオルガニストや王立音楽学校の教授を務めた教会音楽家。

・21-486 番「飢えている人と」は、1977年、ドイツの牧師 F.K.バルトの作詞、カトリックの音楽家 P.ヤンセンの作曲で創作された讃美歌。

・21-451 番「くすしみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

#### 21-14「たたえよ、王なるわれらの神を」

### Praise, My Soul, the King of Heaven

1. Praise, my soul, the King of heaven, / to the throne thy tribute bring; / ransomed, healed, restored, forgiven, / evermore God's praises sing. / Alleluia! Alleluia! / Praise the everlasting King.
2. Praise the Lord for grace and favor / to all people in distress; / praise God, still the same as ever, / slow to chide, and swift to bless. / Alleluia! Alleluia! / Glorious now God's faithfulness.
3. Fatherlike, God tends and spares us; / well our feeble frame God knows; / motherlike, God gently bears us, / rescues us from all our foes. / Alleluia! Alleluia! / Widely yet God's mercy flows.
4. Angels in the heights, adoring, / you behold God face to face; / saints triumphant, now adoring, / gathered in from every race. / Alleluia! Alleluia! / Praise with us the God of grace.

#### 21-486「飢えている人と」

### Brich mit den Hungrigen dein Brot

1. Brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus.
2. Such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied.
3. Teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot, / sprich mit den Sprachlosen ein Wort.
4. Sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel, / brich mit den Hungrigen dein Brot.
5. Sprich mit den Sprachlosen ein Wort, / sing mit den Traurigen ein Lied, / teil mit den Einsamen dein Haus, / such mit den Fertigen ein Ziel.

#### 21-451「くすしみ恵み」= II-167

### Amazing Grace! How Sweet the Sound

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.